

金田一秀穂先生 講義の記録

「私たちの『日本語』を再考する」

【講義1】 「私たちの日本語 心地よい日本語」

金田一秀穂先生は国語・日本語学がご専門と思われることが多いが、日本語教育とも関係が深く、浦和の国際交流基金・日本語国際センターに於いて、海外から来る現地の日本語教師に対し、日本語文法・意味論・言語構造と言葉と文化について教えていらしたことがあった。

講義に先立ち、参加者から事前に先生に対する質問を集め、その中のいくつかについて、お話しして頂いた。

辞書の見出し語は、好きなものを選び、嫌だと思ふものは選びません。

「かがみ論」というのがあり、一つは世間の言語規範を鑑として示します。もう一つの鏡は世間の言葉をただそのまま表す普通の鏡のようなもので、そういう世間の言葉を反映させるものが辞書だと私は思っています。

辞書は完成することがなく、出た途端に改訂版を作成し始めるので、3~4年で定着する言葉を載せます。(例:「三密」はまだ分からない)。

『鬼滅の刃』は固有名詞なので載せませんが、はっきりした掲載基準があるわけではありません。

辞書に載せる言葉は文字言語でなければむずかしいのです。話し言葉でしか使われないものは、採集するのが難しくなります。例えば、アクセントの違いによってできた新しい言葉(平板型アクセントの「パンツ(ズボン)」と頭高型アクセントの「パンツ(下着)」等)は、辞書では区別しづらいです。

いつか音声言語で再生できる辞書ができれば、音声電子機で表現できる新しい意味の説明ができるかもしれません。

辞書を作る人間は「前」と「後ろ」、「右」と「左」というような言葉を、その言葉を使わずに説明するかということに苦心します。普通の人はやらないことを一生懸命考えています。簡単な言葉こそ、説明するのは難しくなりますが。それが面白いことでもあります。

辞書のトリビア

日本語の辞書は「あ」で始まって「ん」で終わります。一番初めのページに何があるかという「愛」という言葉で、最後は「腕力」です。では、辞書の真ん中は何でしょうか、どんな言葉があるでしょうか。「あかさたなはまやらわ」の「な」かなと思うと、日本語というのは始まりの音が前の方に偏っているため、普通の辞書だと真ん中のページは「せ」になります。「せ」に何があるかという、「世界」という言葉があります。だから「日本語は愛と腕力の間を世界でバランスを取っているんだ」と言ったりします。これは、紙の辞書でなければ分からないことで、電子辞書では分からないでしょう。

今の子供たちは電子辞書になじんでしまっているので、「あいうえお順」がわからないという事態が起きています。わたしたちも「いろは順」が難しくなっているのと同じようなことです。こちらでも、アルファベット順がどこまでわかっているのか、心配です。

学生に積極的に発言を促すには、こんな映画を見たなど、教師としての立場を離れて。個人的な話をするのが早いでしょう。食べ物の話だと当たり障りなく割と聞いてくれるでしょう。ある程度お互いが理解しあい、誤解の恐れがなくなれば、宗教や政治の話もできます。

学生からの質問に答えられない時、どうしたらいいでしょうか。

(例：「は」と「が」、「大体」と「ほとんど」の違い等)

それぞれが持っている秘訣みたいなものを話し合ってみましょう。

教授法には、それぞれの国の文化が大きく影響します。

アメリカでは、コミュニケーションアプローチ（場面別に教えてコミュニケーションを重視する）、中国では一生懸命覚えて暗唱するやり方が好まれたりします。

ここスイスでも、日本人には向かないが、スイスの人にはいいやり方と言うのがあるでしょう。非漢字語圏であるスイスは、もっと文字が大切なのかもしれません。

私は、今の日本語・今の日本を教えてもらいたいと思います。外国にいると難しいけれど、正統的・伝統的な日本というのに凝り固まってしまう危険性もあるので、もっと違う、ステレオタイプではない日本をどう伝えられるかを考えてほしいと思います。

先生からの課題について、グループに分かれて話し合った。

(各グループの回答詳細は、16 ページ参照)

生徒からの質問に答える際に気をつけるべきことは何ですか？

質問された時、NG なこと、OK なことは何ですか？

質問が来た際に言うてはいけないことを三つ話された。

一つ目は「例外」、二つ目は「強調」、三つ目は「日本語独特です」と言うことです。

「例外」という言葉は安易に使わないようにしましょう。「例外」と言えば学生は納得してくれますが、規則通りである事象の中で、どれが例外なのかをキチンと分かっている必要はありません。その場限りの誤魔かしをするとあとで困ることになります。

ゴミは、なぜカタカナで書かれるのか。考えてみてください。多くの人は「強調」と答えたくなるかもしれませんが、それは間違っています。「ゴミを捨てるな」で、強調すべき部分は、「ごみ」ではなく「すてるな」のところであるはずですが、でも、「ステルナ」にはなりません。

日本語には強調構文というのはありません。本当に強調したければ、大きな字・赤い字で書く・大声で言うなどで、文法的な構文としてあるわけではありません。

なぜカタカナなのか、答えはまだ出ていないのですが、答えを出すやり方はあります。

例えば、外来語ではなくてカタカナで書く言葉が他にもあります（メガネ、テリヤキチキン等）。そういう言葉をおもいおこして、カタカナで書かれる言葉の共通項を考えてみる、そして自分でなぜなのか答えを出すことができる、そういうことをしてほしいです。

なぜ、強調と言つてはいけないのか。その答えが間違っているだけではなくて、その答えに学生が納得してしまい、もっと悪いことに教師自身がその答えに納得してしまい、教師としてそれ以上考えることをしなくなってしまうからです。

日本語独特というのもやめてください。

「日本人にならないとわからない。文化です」という考え方です。であれば、日本語を理解することは不可能です。それだったら日本語を勉強する必要はなく、教える資格もなくなり

ます。

日本語教師であれば、例えば「忖度」という言葉は説明できるようになってほしいものです。日本語独特だという言い方はしない方がいいと思います。それを理解させることこそが教師の務めだし、通訳、翻訳の仕事です。それができないのなら、その仕事をさっさとやめるべきです。

「わび・さび」「悟りとは何ですか」のような、教師にも「わからない」ということはあります。難しく、道元とか芭蕉でなければ答えられないような問いがあります。どうして答えられないかと言うと、自分自身が母語で理解していないからです。自分の中ではっきり解っていれば説明できます。

勉強というのは記憶・覚えることだと思っている学生が多いですが、私そうは思っていません。これだけインターネットが発達している時代、調べればわかることを一生懸命覚えるのではなく、考えることを学んで身に付けてほしいと思います。ですから、僕の試験は何でも持込 OK で、ネットやスマホで調べても絶対に答えが載っていないような問題を出します。

これから AI の時代には、考えるという事をもっとやってほしいと思っています。

では、答えられないときに、どう答えたらいいか。3つの方法があります。一つ目は、「明日までに調べてきます」というのです。この教師は誠実であると学生は思います。ただし、何度もやると信用を無くします。

2つめの答えは「まだ早いです」というもの。「その問題は35課の135ページでやります」などと言うと、その学生は、この先生はとてこのテキストの内容を分かっていると思いき、満足するでしょう。で、その課になったときには質問したことを忘れていきます。

それでもそれらの手段が使えない、一回限りの講演のときなどです。そのときは、聴衆に聞いてみます。積極的に参加したがつている人たちの答えを数人ピックアップしてまとめてあげれば、先生が自分の答えを認めてくれたということで喜び、聞いているだけの学生も感心します。

日本語を伝えるということは一体どういうことなのか

30何年日本語を教えてきて、何のために教えているのだろうか？と思います。習いたいという人がいるから教えるのですが、それだけでは面白くないという気がします。

例えば、昔何千年も前に中国語を勉強したのは、中国語の向こうにある儒教や律令制度など素晴らしい文明や文化を知りたかったからでした。

スペイン語も、スペイン語の向こうにあるカトリック・キリスト教文化を知るために勉強しました。

英語を勉強することも英語自体が目的ではなく、英語の向こうにある考え方、文化や科学を知るために勉強します。そしてもし私たちが英語の先生であるとしたら、それを伝えたいから英語を教えるのではないのでしょうか。

じゃあ、日本語の向こうに一体何があるんだろう。これを皆さんに聞いてみたいです。

日本語で何が伝えられるんだろう

日本語の向こうにある良いもの、宝物みたいなもの、考え方みたいなものを伝えられるか、そしてそれが世界にとって何かの役に立つのか、そういうことについて、皆さんにそれぞれ考えてほしいなと思います。

ある時、鈴木孝夫先生（注：2003年のヨーロッパ日本語シンポジウムの際、当会にも来瑞されている）に、日本語の向こうに何があると思いますかと尋ねたら、「人間関係じゃないか。人間関係の作り方とか優しさとか付き合い方とか、日本語の一番いい部分はそういうものじゃないのか。」と仰っていました。

『源氏物語』『枕草子』を伝えるのもいいですが、それだけじゃないでしょう。日本が偉いとかいうことではなく、色んなダイバーシティ、各国の色んな個性があって、その中で日本の特色として表されるものが伝えられたらいいなと思います。

日本人の感性とか柔らかさとか日本人の人間関係とかについては、言語社会学者の鈴木孝夫先生の著書『日本の感性が世界を変える』や、岡倉天心の『茶の本』などが参考になると思います。日本映画やドラマの中では、小津安二郎作品や寅さん。今の若い世代では変わってきていて違うのかもしれませんが。

質疑応答の時間 :

「日本のアニメは暴力的でしょうか？」

『鬼滅の刃』など、日本のアニメを見ると日本人は暴力的だと思われるかもしれませんが、作品内の服や着物は伝統的な模様が使われていてとても美しいし、音の出し方も上手く工夫されています。どの部分も日本であるので、見る人自身がそのどこを見るか、考えればよいと思います。

僕が外国の人たちに最終的に言うことは「日本を鏡にして、自分達の事を考えなさい」ということです。自分の文化と言うのはなかなか相対化できないけれども、外から見るとできるでしょう。日本を鏡にして自分の姿を映してみる。日本を見て、自分の国がどうなのか分かってもらいたいと思っています。

「外国語を知る・外国語学習をする・文化を知る」という最終目的は、「自分自身を知る」ということなんだと思います。

そして、違う部分と共通している部分の両方を理解してもらいましょう。それが教師の文化に対するキモだと思います。

日本語教師は日本語を教えることだけではなくて、ガイドみたいなもの。彼らに自己発見をさせるためのきっかけを与えられる仕事なのかなと思います。それはやっていて楽しい。そういう仕事をして頂くといいと思っています。

「継承日本語に携わっていますが、保護者の人から教えてほしいと求められるのが、伝統的な日本についてだったりします。海外で日本人の子供を育て、その子供に日本語を学んでほしいと思っている保護者に声をかけるとしたら、どんなことですか？」

「日本人である」とどうやって言えるかということ、最終的には言葉だと思います。日本語で考えて、日本語で感じて判断して表現できるということ。パスポートとか遺伝的にどうであるかということではないでしょう。

言葉というのは、日本人の心や魂みたいなものを表します。礼儀正しさとか協調性があるとかいうことではなく、日本語をしゃべれるようになり、理解できるようになること。これが外国にいる子供たちにとって大切なことではないかと思っています。だから、具体的にこれを教える、これをやれば日本人になれる、というものではありません。

子どもたちはまだ言葉というものをそこまでよく解っていないので、ベースとしての言語は日本語でも、ドイツ語・フランス語でも構いません。

母語というのは、基本的にはOS/オペレーティングシステムみたいなものなので、それを基にして、その上に色んなアプリケーション（WordやExcel）が載っかります。英語にしるドイツ語にしるその上に載っかって、母語というのがベースにあり、そのオペレーティングシステムをきちんと作っておかないと後で困ったことになります。

何かを考えるとときの一番の基本は、どこまで母語がちゃんと使えているかでしょう。

海外の継承語のケースは分からないですけど、12歳ぐらいまではきちんと母語を植え付けちゃうこと。考えるというのは母語の力。考えられるというのは、日本語あるいはドイツ語がどこまでできているかということで、それが母語力となるでしょう。

記録：フォレストイエ小林 瑞穂

【講義2】 「今の日本語教育と日本語」

1. 我が家の常識は世界の非常識

今日の本題に入る前に、僕の経験から話したいと思います。僕は昔米国に3年間住んでいたことがあって、ちょっとその時のことを思い出しました。

海外に住んでいる日本人の日本語教師って、まるで神様、独裁者ようになってしまいがちですが、「我が家の常識は世間の非常識」だったりすることもあります。教師が、自分が日本人の代表になった気になってしまうのは危険です。「自分は間違っているかもしれない」と謙虚でいて欲しいです。それから、外国人に、日本人の行いを嘲笑された時、日本を代表するみたいに謝るのもやめて欲しいですね。

2. AI との共存

生まれた時から、インターネットの恩恵に与っているZ世代の子供たちは、これからが大変です。AIと共存していかなければならないからです。これで世界はどんどん変わっていきます。かつて現金を扱う銀行員はエリート職でしたが、今後、必要なくなる職種かもしれません。今、中国に行くと、もう現金は使えなくてPayPayなどのアプリを使いますからね。必要なくなる職種といえば、医者もそうでしょう。いまどきの医者は聴診器を使いません。検査結果のデータを見て解説するだけです。それなら、自分でもできそうじゃないですか。戦争も戦士がいらなくなりますね。ロボットやアンドロイドやドローンが人殺しをするのです。SF映画の世界が現実になっています。怖いですね。

では、教師はどうでしょうか？一番先に要らなくなるような職種ですが、果たしてそうでしょうか？ドラえもんに出てくる「翻訳コンニャク」はそれに近いものが既に実在します。先に述べたZ世代の子供達の勉強の仕方は大きく変化しました。以前は、勉強とは記憶することでした。しかし、今は情報はいつでも手に入るので、記憶する必要がありません。今大切なのは、何かを覚えることではなく「どこで正しい知識が得られるか」を知ることなのです。それを教えるためにも、まだ教師は必要かなって僕は思います。

3. 機械翻訳で心は伝えられるか

本題に戻る前に、教え子の例を紹介します。彼女は、大学の同級生と国際結婚をしました。でも、結婚相手は日本語もさほど上手ではない中国人です。そして彼女は中国語ができます。困らないのかと聞くと、彼女曰く「先生、愛に言葉はいりません」と。心が通じることこそ大切なことなのです。

ホモ・サピエンスが地上に現れたのは今から約 20 万年前とされています。そして凡そ 5 万年前に恣意的言語（記号言語）が生まれました。ではそれまでの 15 万年間、人間は言葉を持たずにどのように意思疎通をしていたのでしょうか。鍵は鳴き声や動作です。言葉を持たない猿や犬だって、ちゃんとコミュニケーションできてますよね。同じです。言葉がなくても、鳴き声や動作、表情で心は通じるのでしょうか。

日本で最も言葉力があると僕が信じている谷川俊太郎氏が「言葉は無力だ」と言っています。言葉より、言葉の介在しない音楽や絵画の方が感情表現ができると彼は考えているようです。しかし、恣意的言語、記号言語が無力であっても、私たちには声があります。感情は、この声で表現してきたのです。鳴き声を分析することで機械による感情の翻訳が可能になる日は来ると、僕は思います。

4. 機械翻訳の限界

とはいうものの、現時点での機械自動翻訳には限界があります。いまいちど「日本語らしい言葉、表現」について考えてみましょう。

外国語から日本語に翻訳する人は、日本語が上手なのであって、外国語が上手なのではありません。フランス文学の翻訳で有名な澁澤龍彦氏はフランス語ではなく日本語の達人なのです。井伏鱒二も翻訳を多く手がけていますが、英語から日本語には訳せても、その逆はできない。谷川俊太郎もそうです。

機械翻訳は、事務的なことには非常に優秀なのですが、文学的表現は苦手なようです。固有名詞などは翻訳できないことが多いです。固有名詞の他には、どのような例があるでしょうか。

文章の例を挙げると、「道の上に財布がある」は日本人には不自然で、日本人なら、「道に財布が落ちている」と言うでしょう。認知理論の問題なのですが、「箱の中に〇〇があります」って、日本語の教科書にはよく出てきますが、これも、普通なら「箱に〇〇が入っています」と言いませんか。言い回しでいうと、例えば「藪から棒」は単に「急に」ではないですよ。

では、ここに集まった先生方、日本語独特だと思う言葉や言い回し、教えるに苦しかったり、翻訳は無理だろうと思った言い回しや文法事項があれば、教えてください。

5. 基本は「日本語独特」なものはない

「日本語独特」という表現には語弊があります。他の言語を知り尽くしていない限り、そんなことは言い切れるわけがないし、ありえないです。ですから、あえて言うなら「日本人が特に好きな言い方」となるでしょう。授受表現や敬語も、日本独自というわけではないですよ。

6. 機械翻訳しにくい表現

他動詞・自動詞の違いがない言語も世界にはあります。そのような言語に日本語を翻訳するのは難しいでしょう。

語彙の面では、例えば、「親」と言う言葉なんですが、英語や中国には、実はないんですね。性別や人数をはっきりさせる必要が日本にはないのですが、例えば中国では親猿、子猿って言えないんですよ。大きい猿、小さい猿になるそうです。他にも例があると思いますので、皆さん調べてみてください。

敬語と固有名詞は機械にはうまく翻訳できません。方言も、ちょっと無理があるようですね。一人称の名称が日本語には多数ありますが、それを機械に学習させるのも難しいですね。

7. 発話の中での意味

「揺れた!」をそのまま英訳しても、地震の危険は相手には伝わりません。でも日本人は、「揺れた」といえば、それは「地震だ」を意味するとすぐにわかります。コンテキストで理解しあっているわけです。

どんな時に日本人は「これはなんですか?」と言いますか。怒っている時ではありませんか。ですから、「ごめんなさい」が正しい答えとなります。娘が深夜に帰宅した時「今何時だと思ってるの」と聞いて、「2時だと思います」って答えたら、親は叱るでしょ?娘は謝らなきゃいけないんです。「今日はいいい天気ですね」に対応する返答は「今日は会社が休みなんです」だったりしますが、これが成り立つのは、僕らは文字に現れた意味ではなく、発話のコンテキストと状況判断で解り合ってるからで、これは、機械翻訳しても、本当の意味は伝えにくいでしょう。夏目漱石の会話の多い作品などは、ですから機械翻訳には無理かもしれません。

8. 困惑時の敬語

僕と天皇陛下と一緒に寿司を食べようとしている場面をちょっと想像してみてください。あろうことか、醤油差しが天皇陛下のお手元にしかない。だけど、僕もお醤油が欲しい。僕は天皇陛下にどのようにお醤油を取って欲しい気持ちを伝えたいのでしょうか?

天皇陛下にお願い事をするなんて、そもそもあり得ないのですが、どんな敬語を使っても、それは失礼になってしまう。そうすると、僕は、聞こえるか聞こえないかの小声でボソッと「おしょうゆう。。。。」って呟くしかない。それを耳にした天皇陛下がお醤油差しを僕に渡してくれることに期待するしかないのです。自分は、困っているのだ、と伝えることしかできないのです。お願いすること自体が失礼なんですから。

ですが、子供がお母さんに向かって「ソース」って言ったら、「私は天皇ほど偉くない」と言って、注意しましょうね。

9. 再び敬語について

なぜ外国人留学生に敬語を教えるべきなのか。基本的には、「です・ます」で相手を敬う気持ちは十分表現されています。しかし、敬語の度合いは相手との上下関係を表すから、と教えてしまうと、上司ではないバイト先の同僚などと、「一だよ」をすぐに使い始めます。ここで忘れてはいけないのが、日本人は外国人、特にアジア系外国人を軽蔑する傾向にある、という厳しい現実です。なので、自分を守るために、外国人留学生は敬語を覚えるしかないのです。言葉はファッションのようなものです。カジュアルな服でもいいのだけれど、シックな服装の方がバカにされないですみます。だから、丁寧な言葉遣いをしていた方が安全だよ、と僕は言っています。

ところで、女性は、同性と話す時と異性と話す時では、どちらの方が敬語を使うのでしょうか?実は、女性同士で話す時の方が、敬語を使います。敬語を使うことで、ちょっとセレブ気分なのかもしれません。言葉遣いで、ステイタスを上げることができるといえるのでしょうか。

10. 謙譲語

問題発言かもしれませんが、僕は謙譲語なんて本当はいらないよ、と言いたいです。最近、クレマーが多くなったから、少なくとも言葉だけは丁寧にしようっていうんでしょうかね。それって、よくないですよ、本当に。誠意を見せようとしたら、顔の表情とか声とか、そっちで表現する方がいいんです。

11. 受け身形

「波が子供をさらった」ではなく、「子供が波にさらわれた」と私たちは言いますよね。大切なのは子供だから、子供を主語にしたいという意味が自然と働いているのです。私たちは、主語にしたい方、主語になりやすい方をまず選択してから、文を作るのですが、そうすると、受け身形の文になるしかないのが日本語の特徴です。

日本語では無生物主語が多いのも特徴です。「交流基金がこの催しを援助しました」より「この催しは交流基金に援助されています」の方が自然な日本語でしょう。

「聖徳太子が法隆寺を建てた」より「法隆寺は聖徳太子によって建てられた」って教科書にもありますが、この場合、聖徳太子は歴史的人物で固有名詞化され人扱いされていないので、文の主語にならなくてもいい、という風に説明できるかもしれません。この辺りは、機械翻訳で差が出せるかどうかは、まだよく分かっていません。

12. 自動詞と他動詞

「結婚することにしました」ではなく「結婚することになりました」となるのは、日本語は自動詞を好む傾向があるからです。ドイツ語はどうでしょう。少なくとも英語や中国語と比べると、日本語は自動詞を好むかなって感じがします。しかし、それは傾向であって、地域差や個人差がありますから、一般化するのは危険です。

13. 使える日本語

仮定を表すには色々な文型がありますが、「～たら」はほぼ万能です。しかし「犬も歩いたら棒にあたる」とは言いません。こんな時にはこういう言い方をするのだ、と教えてしまうことで、学習者に「使える日本語」を教えることができます。日本人が野菜の典型と思っているのは、長ネギではないでしょうか。これも国によって、玉ねぎだったりジャガイモだったり変わってきます。文型の説明を長々とするより、典型例を教える方が分かりやすいし間違いも減ります。

ジャガイモで思い出したんですが、学生とマック（マクドナルド）へ行って、何が食べたいかと聞いたら、「イモ」と言われてびっくりしました。僕にとってはイモといたら里芋なんですけど、これは年齢の差でしょうか。なので、典型例といっても、外れることはもちろんあります。スイスのみなさんにとって「イモ」といったら、やっぱりジャガイモかしら。

「鳥が鳴いている」の「鳥」は、日本人だったらスズメを想像するでしょう。それが典型だからです。そんなことを日本語教師は色々紹介してあげたらいいんじゃないかなって思います。

14. 美しい日本語を忘れずに / おすすめの書

忘れてしまっている日本らしい言葉ってたくさんあると思います。オノマトペなんか、どんどん変わってしまって難しいのですが、とにかく使い続けることが大切です。

井伏鱒二の作品は美しいですね。「のきばの月を見るにつけ 在所のことが気にかかる」というのがありますが、情緒豊かでしょう。今僕が読んでいるのは、岡本綺堂の「半七捕物帳」という作品なんですけど、これもなかなかいいですよ。ちょっと昔の言葉がたくさん出てきます。芥川龍之介も語彙数が豊かですが読みやすいのでおすすめです。

15. 最後に

日本語教師は中立の立場をとってください。日本人を代表するのではなく、「私はこう考える」というスタンスでいてほしいと思います。個人として学生と付き合っていて欲しいなと思っています。